

# DXが加速するGX

## —リサイクルビジネスの目線から—

### 第5回

資源循環システムズ  
代表取締役社長

林 孝昌

内容を適宜提供すること

「攻めのDX」がもたらす最大の効能は、生産性向上である。新規事業を生み出しながら売上を増やしつつ、その事業効率性を高めることで自社競争力の強化を促す。例えば収集運搬段階において、発生源における対象貨物の容積や重量をセンシングで把握しつつ、自社車両の運行履歴管理を徹底できれば、AI等を活用した収集ルートの見直しをきっかけにした効率化が実現可能となる。また、中間処理施設に搬入される貨物の組成・性状等をあらかじめ把握できれば、ロボット選別の導入や遠隔制御による効率的な焼却等も可能になるであろう。むしろ処理施設内の作業員の業務従事内容の把握も、作業プロセスの高度化や労働安全管理の徹底とい

## 「攻めのDX」が促す生産性向上

## クラウド活用による

## データ主導型ビジネス化

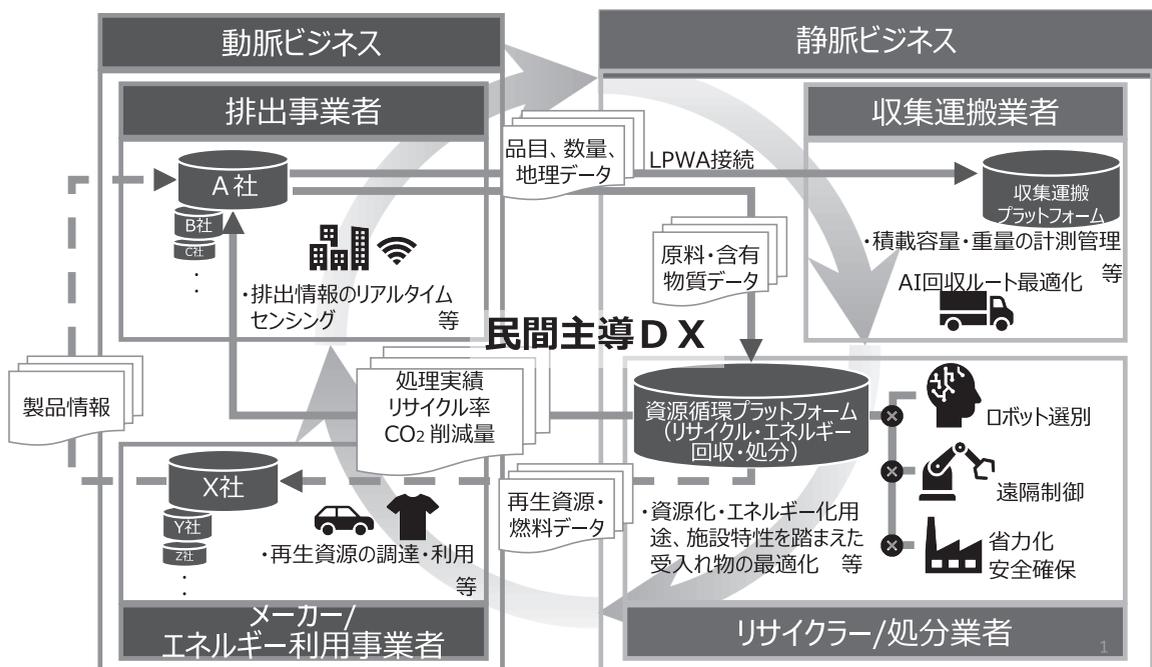
さらに、中長

オープン化することが情報管理の高度化を実現する近道となる。

下の事業者への情報提供実施とそれに伴う動静脈連携実現の必要性である。スコア3の考え方に則ったCO2排出量削減や適正処理に伴うリサイクル率向上が求められていく排出事業者は、裏付けのある定量情報のフィードバックを求める可能性が高い。川下に販売するリサイクル製品に

タのみであり、そのプロセスは自社ノウハウと秘匿しつつ個社レベルのリスクとして管理したいというのが本音であろう。だからこそ、クラウド化を通じて民間主導の資源循環プラットフォーム整備が求められる。幅広いクライアントの情報を一括管理しつつ、必要と

は、大手リサイクルビジネスやコンソーシアム事業が具体化できた時に「データ主導型ビジネス」への扉が開かれるはずである。



「攻めのDX」が促す生産性向上